様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４６０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２８５１７７

研究課題名（和文）謙遜と自己高揚の普遍性に関する１３ヶ国比較研究：脳生理学的基盤の検討を含めて

研究課題名（英文）Cross-cultural research on the universality of modesty and self-enhancement in 13 countries: With neuro scientific examination included

研究代表者
山口　勧（YAMAGUCHI, Susumu）

奈良大学・社会学部・教授

研究者番号：８０１３４４２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,800,000円

研究成果の概要（和文）：謙遜についての比較文化的研究を行い、21カ国の国民を対象にした調査及び実験的な研究により、謙遜が文化に共通した価値であることを確認した。より具体的には、謙遜の目的が低い自己評価の提示ではなく、謙虚であることを示すことにあることが、確認された。さらに、一方では、実験研究により、謙遜の程度や仕方には、文化差があることを示す結果が得られた。同じように謙遜しているといっても、文化により、その謙遜が意味する自己卑下の程度が異なっていることがわかった。

研究成果の概要（英文）：Cross-cultural studies on modesty in 21 countries revealed that modesty is a shared value across cultures. The purpose of modesty was found to be oriented to manage self-image rather than self-depreciation. On the other hand, the obtained data from experimental studies indicated that the extent and style of modesty varies with culture.

研究分野：社会心理学

キーワード：謙遜　比較文化

１．研究開始当初の背景

従来の日本人論では、日本人は謙遜を美徳としており、自分を積極的に売り込んだりしない、というのが定説であった(e.g., Lebra & Lebra, 1986)。社会心理学においても、Heine et al. (1999)に代表されるように、日本人にとって自尊心は大切なものではなく、日本人は自己批判的である、という主張がなされてきた。これに対して、たとえば、Sedikides et al. (2003)は、日本人でも自己高揚を行うと反論し、現在でも日本人における自己高揚の有無に関する論争は決着していない。

こうした状況において、山口らは(e.g., Yamaguchi et al., 2007, 2008;業績論文 16)、より直接的な手法で日本人が自尊心を高めようとしていることを示し、さらに、科研費による研究において、従来の日本人に関する自尊心研究のメタ分析を行い、欧米と同じように自尊心が主観的幸福感や自分の身体的な魅力についての高い評価などと結び付いていることを示した(e.g., Yamaguchi, 2010)。ただし、一貫して示されていたのは、顕在的指標を用いて測定した自己評価が欧米よりも低い、という傾向であった。中学二年生でも、東アジアの生徒の自己評価は英語圏の生徒の自己評価よりも低いが、学力テストの得点は高いという結果も得られている。しかし、multi-level analysis を行うと、確かに文化間の差は存在するが、個人レベルではどの文化でも得点の高い者ほど自己評価が高いという結果が得られている。これは典型的な ecological fallacy(Robinson, 1955)であるが、どの文化でも自分の実力に応じた自己評価を持っているのが適応的であることを意味していると考えられる。一方で、高い自己評価を示すことが、少なくともアジア文化においては適応的ではないことを示すデータも得られており、自己高揚と謙遜との関連を明確にする必要があることが明らかになってきた。

<u>謙遜の通文化的一般性</u>

すでに述べたように、日本を含む東アジア文化圏において、謙遜が一般的であることは良く知られている。そして、西欧文化圏でも謙遜がポジティブな価値を持っていることは Sedikides et al. (2008)によっても主張されている。したがって、適応論的な視点から、謙遜がどの文化でも少なくとも歴史的には、適応的であったことが考えられる。実際、我々の科研費による研究でも、アメリカ人でさえも、謙虚な人を自己高揚的な人よりも好むことが示されている。そうすると、実際に何らかの意味での謙遜が、文化を超えて価値を持つことが予想される。また、現在の社会で、東アジア文化圏で一般的と言われている謙遜と、西欧文化圏で価値があるとされている謙遜とが同じものなのか、ということを検討する必要も出てくる。そのためには、謙遜の概念についての分析的考察が必要となる。

<u>謙遜概念の分析</u>　謙遜には内心の謙虚さ、という側面と対人的に表明される自己呈示としての謙遜とが存在すると考えられる。前者のタイプの謙虚さは、中庸(過不足がなく、極端に走らないこと)と関係しており、後者は自己呈示の方略と関連していると考えられる。Cai (personal communication)は、これらを本物の謙遜(authentic modesty)と戦術的謙遜(tactical modesty)とに分類している。

<u>価値の併存と支配的価値</u>

Schwartz et al.(1987)などが示しているように、どの文化も単一の価値に基づいて構成されているわけではなく、複数の価値が併存しており、それらはどの文化にも共通していると考えられる。たとえば、個人主義的な価値とされる自立(independence)は、日本でも価値があるものとされているし、集団主義的な価値である協力(cooperation)は欧米でも価値があるものとされている。このことに異論はないはずだが、多くの研究は二項対立的

アプローチをとり、自立重視の欧米対協調重視の東アジアという図式を描いてきた。しかしながら、現実ではどちらの価値も重要でありながら、相対的に支配的な価値に基づいて行動する、ということが起こっていると考えるべきである。個人主義的な人は、他者との協力関係よりも自立を重視し、集団主義的な人は自立よりも他者との協力関係を重視して行動する、ということになる。このような選択が行われるのは、それぞれの文化において、自立重視の選択と協力重視の選択のどちらがより適応的か、という視点から解釈するのが適当であろう。今回のテーマに即して言えば、自己高揚も謙遜もどちらも望ましいが、この二つは往々にして対立するものであり、その場合にどちらの選択をしたら当人にとって適応的か、という視点から自己高揚と謙遜が選択されている、と考えられる。

仮説　謙遜は、自己高揚と同様に、どの文化でも価値がある。ただし、謙遜と自己高揚が対立するとき、どちらを選ぶかは、文化によって異なる。

予測　自己高揚と矛盾しないような弱い謙遜はどの文化でも選択されやすいが、自己否定につながる強い謙遜は、特にアジア文化圏で選択されやすい。

弱い謙遜は、自己高揚とも両立するタイプの謙遜である。通常、謙遜は他者を高め、自己を低めることによってなされるが、自己の高い評価は主張せずに、他者を高めることも可能である。たとえば、欧米でも、様々な授賞式において、受賞スピーチにおいて他者の貢献を強調することがよく行われる。これは自己高揚を犠牲にすることなく、相対的に他者を高めることによって謙遜の機能を果たすものである。一方、強い謙遜とは、自己評価を犠牲にしながら、他者を高めるようなタイプのものである。たとえば、自分には過分の賞であり、他にもっと優れた人がいる、というものである。あるいは、他者の服装を褒めるだけでなく、自分の服装のセンスをけなす、というようなものもこのタイプに入る。

２．研究の目的

本研究では、単なる質問紙による従来のデータに加えて、潜在的なレベルおよび脳生理学的レベルでデータを収集・分析することにより、長い間の自己高揚-(謙遜の一形態としての)自己批判論争に終止符を打つことを目的とする。ここで、自己批判は、これまでの研究では明確には述べられてきていないが、自分はまだ不十分であるとする意味での謙遜を前提としており、謙遜の一種と考えられる。

これまで自尊心と謙遜をめぐる論争に決着が着かなかった一つの理由は、顕在変数の限界である。とくに、どの程度の高い自尊心/自己評価を表明するか、というときに、謙遜の動機が密接にかかわっており、顕在変数ではその影響を排除することが難しい。そこで、本研究では、より自己呈示の動機に影響を受けにくい潜在的な尺度、具体的には潜在連合テスト(implicit association test,IAT)を用いる。このテストについての批判もあるが、後に方法で述べるように直近の研究結果は、批判されているような問題は回避できることを示している。さらに、本研究では fMRI(functional magnetic resonance imaging)と ERP(event-related potential)という手法を用いて、謙遜の脳生理学的な基盤までマルチレベルで確認することにする。

また、これまでの研究のように、日米比較、あるいは中国と米国との比較という単純なものではなく、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの１3 カ国の被験者を対象にデータを収集することにより、謙遜の価値と自己高揚との関係について文化を超えた普遍性を示そうとするものである。

以上のように、多数の文化でしかも多面的なデータを収集することによって、自尊心-謙遜の普遍性についての論争に決着が着く

ことが期待される。

３．研究の方法

質問紙法と並行して、一部の国では謙遜 IAT(implicit association test)を実施した。これは潜在的な連想を調べるもので、意識下で謙遜が快と連合しやすいかどうかを調べるものである。さらに、我が国では謙遜・自己高揚の脳生理学的基盤についての測定を行った。具体的には、ERP(event-related potential)を測定し、脳生理学的反応がどのようになっているかを測定した。

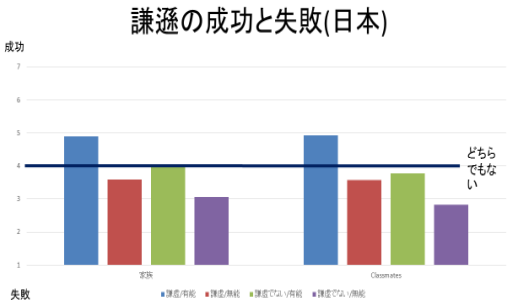
以上の手法により、顕在指標、潜在指標、それに脳生理学的な指標の収束的な証拠を求めた。

４．研究成果

主要な結果は、質問紙法によるものである。まず、日本の他、アルゼンチン、ブラジル、中国、エストニア、ドイツ、インドネシア、イタリア、韓国、ニュージーランド、フィリピン、ポーランド、ロシア、南アフリカ、スペイン、台湾、トルコ、英国、ウクライナ、米国で行った調査により、予想通り、謙遜という価値はどの国において価値あるものとして評価されていることが明らかになった。それだけでなく、より具体的に、謙遜を行った際には、自分の能力は相手に低く評価されることなく、自分が謙虚な人物であると評価されたときに謙遜がうまく行ったと考えることが明らかになった。このことは、どの文化においても、謙遜を行う際には、自己呈示的な動機が共有されていることを意味する。さらに、実験的な手法を用いた研究によっても、このことが確認されている(図 1)。

図 1 は日本の結果であるが、韓国、ハワイの白人でも同様の結果が得られた。

一方、IAT および ERP を指標とした研究では明確な結果は得られなかった。



５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 村上史朗・中原洪二郎 (2016). 日本語版状態自尊心尺度の作成　奈良大学紀要, 44, 119-128. 査読なし

〔学会発表〕（計 3 件）

① Yamaguchi, S. , Morio, H., & Murakami, F. (2015, July). Motivations and Perceptions Underlying Modesty among Japanese, Koreans, and Caucasians in Hawaii. Paper presented at the 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Cebu, Philippines.

② Yamaguchi, S. , Morio, H., & Murakami, F. (2015, July). Motivations underlying modesty among Japanese. Paper presented at European Congress of Psychology, Milan, Italy.

③ 村上史朗・中原洪二郎 (2015). 日本語版状態自尊心尺度の作成　日本グループ・ダイナミックス学会第 62 回大会 2015 年 10 月 11 日～12 日 奈良大学　(奈良県奈良市)

６．研究組織

(1)研究代表者

山口　勧（YAMAGUCHI, Susumu）
奈良大学・社会学部・教授
研究者番号：80134427

(2)研究分担者

村上　史朗（Murakami, Fumio）
奈良大学・社会学部・准教授
研究者番号： 30397088

森尾　博昭（Morio, Hiroaki）
関西大学・総合情報学部・教授
研究者番号：80361559

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)